

夜の声

井上靖

夜の  
声

井上  
靖

新潮社  
版



© YASUSHI INOUE  
Printed in Japan. 1968  
.....

# 夜の声

定価五〇〇円

昭和四十三年八月十五日 発行  
昭和四十三年九月十五日 二刷

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式會社 新潮社

郵便番号 一六二

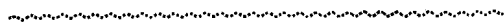
東京都新宿区矢来町七一  
電話東京(250)一一二一

振替東京八〇八

印刷 株式會社 金羊社

製本 新宿 加藤製本所

(乱丁本はお取替えいたします)



夜  
の  
声

裝幀・挿絵  
加山又造

## 一章

その朝、千沼鏡史郎はいつものように五時に眼覚めた。一昨年還暦を迎えたが、その頃から眼覚めの時刻は五時と一定している。前夜の就寝が早かろうと遅かろうと、翌朝はぴたりと五時に眼が覚める。

鏡史郎は床から離れると、まず縁側の雨戸を繰り、それから北側の窓の戸を開け、部屋に冷たい外気を入れてから、寢床を上げる。そして寢床を上げたあとで、枕許に散らばっている何冊かの書物を窓際の机の上に片付ける。これで八畳間の畳の上には一物もなくなるわけだが、これだけのことをしてから、鏡史郎は戸を開け放ってある北側の窓の前に立つ。これも毎朝のことである。鏡史郎の眼に、段々畑を載せて北方に下がっている広い台地と、その裾を走っている下田街道と、その向うに点々とちらばっている隣り部落の人家の茂りがはいつて来る。この二三年來、この田舎の街道にもバスや自動車の往来が烈しくなつて、昼間そこに眼を遣ると、玩具のような小さい街道に、玩具のような小さいくるまの走っているのが見えるが、朝のこの時刻はまだ一台のくるまも姿を現わしていず、眼に映るすべてが早朝の冷たい空気の中に澄んでいる。鏡史郎は隣り部落の西の外れにある木立の茂みの上に眼を据える。晴れている日にはそこに小さい形のいい富士が姿を見せている筈である。

——ああ、今日は富士がきれいだな。

とか、

——ああ、今日は富士が見えないな。

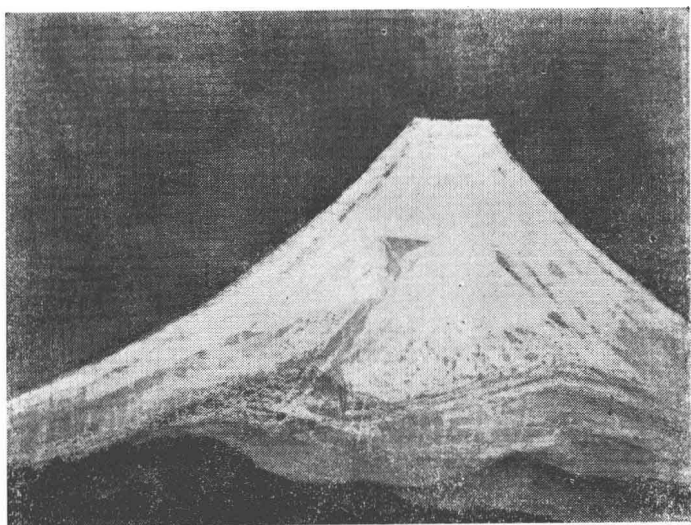
とか、鏡史郎は毎朝のようにそのいずれかの感慨を心の中で洩らす。富士が見えたからどう、見えないからどうというのではないが、この方は還暦以前から身についている日課である。若い時は富士が見えるとか見えないとかいうことに氣を使った記憶はないから、恐らくこれは妻を亡くしてからのものである。妻を亡くしたのは五十三歳の時である。毎朝北側の窓の前に立つようになつてから、いつか十年程になるわけである。

鏡史郎に、この朝、いつもと違つたところがあるとすれば、多少期待を持って富士の方へ視線を投げたことである。今日だけは晴れていて貰わないと困ると思つた。よほどの用事のない限り、めつたに上京しないが、今日はその年に一回か二回の上京の日に當つていた。

空は氣持よく晴れており、まだ上半身を白い衣で包んでいる富士が、青い裾を長く引いて見えている。雪のかぶり方の加減か、斜面の角度は少し鋭くなつてゐる。鏡史郎は北斎の版画でこのような富士を見たことがあるように思つた。

鏡史郎は縁側から庭へ降り、洗顔するために井戸のある背戸の方へ廻つて行つた。鏡史郎の部屋と書庫は別棟になつてゐるが、それと一間ほどの短い廊下でつながつてゐる母屋の方は、まだ戸を閉めたまま寝静まつてゐる。

鏡史郎は井戸水で顔を洗つた。四年前に狩野川沿いに散らばつてゐる十幾つかの部落が一緒に



なつて一つの町を作つたが、町制が布かれた時から、鏡史郎の住んでいる部落には水道が引かれた。どの家も台所を改造して、流しに水道の蛇口をつけた。その時から食事の後片付けのために、井戸端まで出掛けて行く女たちの姿は見られなくなった。食事の後片付けばかりでなく、洗顔も洗濯もみな水道の恩恵に浴している。大抵の家が、水道の出口を戸外にも設けていて、そこで洗濯をしたり、畑にやる水を汲んだりしている。

併し、鏡史郎は毎朝、井戸の厄介になっている。ポンプの把手を上げおろしして、井戸水を古いかなだらに受けて、それで顔を洗う。母屋の方がまだ起き出さないいで、台所の水道は使うわけには行かないが、水道の水を使おうと思えば、コンクリートで固めてある洗濯場の水道を使うこと



ができる。が、鏡史郎は顔だけは井戸水で洗わないと気がすまない。この井戸もいまは、ポンプで汲み上げるようになっていて、昔はもちろんつるべ井戸で、鏡史郎の少年時代までは、毎朝のように、湿ったつるべ網を、身体の重みをかけるようにしてたぐり、地中深いところから水を汲み上げたものである。その頃のつるべ網の冷たい感触は、いまでも鏡史郎の手に残っている。

鏡史郎の一代にも、井戸は盛衰の歴史を持つてゐるわけで、つるべ井戸からポンプ井戸に変わり、そしていまは、あってもなくても、さして痛痒を感じない存在になってしまったのである。

鏡史郎は、井戸水でないと洗顔した気持にならないが、それとは別に、誰からも見棄てられようとしている井戸に、自分だけはずき合つてやろうという気持がないでもない。

鏡史郎は洗顔し終ると、毎朝のことであるが、コップ一杯の水を飲む。これは健康保持のためである。幼い頃父親が毎朝水を飲んでいたのでふと思ひ出して、四十歳頃それを真似したのがきっかけとなつて、それ以来、毎日欠かさないで続けて来ている。医学的に見て、それが健康にいかどうか、そうしたことは判らない。

——井戸水は、時折調べてみた方がいいでしょうね。

子供たちが、時にそんなことを言うことがあるが、いつも鏡史郎は答える。

——父親がやっていたことなので、よくない筈はないだろう。

鏡史郎は何事につけても、七十歳で死んだ父親というものを、そのようなものとして見るようになってゐる。

井戸端を離れると、鏡史郎は背戸を歩いた。昔土蔵があつたあとを花壇にしてあるほか、格別

庭には作っていないが、背戸は二百坪程の広さがあって、この部落で一番大きい椎の木が東南隅にでんと坐っており、これも亦部落では一番大きい樺の木が、田圃との境に、いまは葉を持たぬ枝を天に向って突き上げている。

鏡史郎はこの樺の木を仰ぐのが好きである。落葉している時は落葉している時で、芽吹き時は芽吹き時で、葉を繁らせている時は葉を繁らせている時で、何とも言えず美しく立派である。なかなか人間は、この樺ほどの貫禄を身につけることは難かしいと思う。大人物に対して、鬱然と大樹を仰ぐ思いがあるというような言葉を使うが、どうしてなかなか、容易なことではこの樺ほどにはなれない。

鏡史郎は樺を仰ぐのを手始めに、一本一本、背戸の樹木を見て廻る。朝の散歩と言いたいが、散歩ではなくて見廻りである。しゃくなげ、梅、つつじ、椿、そうした雑多な木を、何か変事は起っていないかと見て廻る。梅だけが白い花をつけている。梅は四五本あるが、いずれも老梅である。昔は純白な花をいっぱい着けたものであるが、数年前より花は少なくなっており、しかも白さに微かに黄味をさして来ている。梅も亦老いると、花のつけ方に老化現象を見せるものとみえる。咲く時期も多少狂って来ている。昔は二月中旬に花をつけ、三月の初めには散ったものだが、いまは二月の終りに花をつけ、三月の中頃まで咲いている。それにしても、もう二三日の生命であろう。

背戸をひと廻りすると、鏡史郎は縁側から上がり、寢室の隣りの書庫へはいって行つた。鏡史郎も、家の者も、部落の人も、みんな書庫と呼んでいるが、別段特に書庫として造られた部屋で

はない。畳の敷いてある十畳間で、鏡史郎の父の代までは専ら客用に使われた奥座敷であるが、いまは壁面全部に書棚が造られてあつて、そこにぎっしりと夥しい数の書物が詰っている。寝室にも机が置いてあるが、この部屋にも、庭に面している側の一隅に机が一つ置いてある。

来客の応接は寝室兼居間の方ですませるので、書庫にはめつたに人は入れない。特に蔵書を見せてくれと言ってくる客は別だが、普通の訪問者の場合、汚れた手で書物を弄られたりするのが厭なので、なるべく書庫の方には招じ入れないことにしている。

従つて、寝室兼居間の机は、机というより卓に近い大ぶりのもので、来客があると、それをまんな中にして向い合つて坐る。書庫の机の方は専ら鏡史郎の書見用である。毎晩、家に居る限り、夕食後から就寝までの時間を、鏡史郎は書庫の机に向つて過す。

机の上には、硯箱、筆立て、インキ壺、灰皿、郵便物を入れてある文箱、ぶんちん、そんなものがぎちんと、それがあるべき場所に置かれている。竹の筆立ての中には毛筆、万年筆、鉛筆、物指、拡大鏡、はさみ、ペンナイフ、そんなものが入れられてあるが、朱筆用の筆も二本納まつている。そのほかに、机の上には孫のさゆりの写真が小さい額縁に入れられて飾られてある。これだけはちよつと場違いの感じだが、ひと月程前、長男の仁一夫婦がやって来た時、庭で撮つたもので、鏡史郎にとつては初孫である二歳四カ月の女兒の顔が、余りよく撮れたので、あり合せの小さな額縁に納めたのである。

机の前には座蒲団、その横には桐の胴まるの古火鉢がある。若い連中が石油ストーブの使用を勧めるので、むげには拒否しかねて、居間の方では使っているが、書庫の方には持ち込まない。

小さな火鉢に手をかざすことで我慢している。今年の冬も風邪をひかなかったくらいだから、若い者たちがわいわい騒ぐほどのこともない。

鏡史郎は書庫の空気を入れ替えると、これも毎日のことであるが、書棚をぐるりと見廻して、ここでも異変があるかどうかを確かめる。異変のあろう筈はないが、一応そういう気持で見廻さない、心が落着かない。

書棚に詰っている書物は、ことごとく万葉集関係のものばかりである。小学校の平教員をしていた三十歳の頃から集め出し、それから今日までに三十年以上になるが、今だに月に二冊や三冊は増えている。凡そ万葉集という名がつく限り、研究書、解説書は勿論のこと、素人向きの写真集、紀行集、中学生向きのものに到るまで、一応全部集めることにしている。紙不足の戦中、戦後の一時期はさして神経を使うことも要らなかったが、昨今のようにめったやたらに書物が出始めると、万葉関係のものでも出版されない月はないと言っていいくらいである。新書判の形で出たり、文庫本の一冊として出版されたりするので、新聞の広告も注意しなければならぬし、読書欄にも、眼を通さなければならぬ。

寄贈本も多少はあるが、その数は知れたものである。東京に出ている子供たちも注意して、新しい書物が出ると、すぐ報せてくれるが、しかし、何と言ってもひとつとことなので、本人が気をゆるめるわけには行かない。

鏡史郎は新聞を三種とっている。いっさいむだなことは嫌いな性分だが、新聞だけはむだを承知で、三紙を配達させている。これに彼が三日にあげず顔を出している役場とっている二紙を

合わせると、大体、これで中央紙に出る万葉関係の随筆や論文は逸することはない。万葉関係のものは地方紙に出ることも多いが、この方は同じように万葉集に夢中になっている地方の素人研究家たちが報せてくれたり、掲載紙を送ってくれたりする。雑誌の方は、新聞の広告で見て、万葉関係のものが執筆されてあるものだけを、沼津の書店から取り寄せることにしている。書物の方は入手したら書棚に並べるだけで事足りるが、新聞の論文や随筆となると、糊とはさみの作業を要する。そうしたものを貼り込んだスクラップが何十冊かになっている。

何分三十年余にわたる蒐集だから、多少自慢できるものがないでもない。俗に慶長本万葉集と呼ばれている江戸初期の古活字本など、その一つである。全部で二十巻あるが、二巻ずつ綴り合せた十冊が帙の中に納められてある。もともと百部ぐらいしか刷られていないもので、それが長い歳月の間に数少ないものになってしまっている。

それから、北村季吟の拾穂抄の木版二十冊も、鏡史郎のこの書庫にはいつている。これは万葉集全二十巻に初めて頭註をつけたもので、万葉研究史上重要な業績の一つとされているものである。最近復刻版を出す話を持ち上がっているが、今のところまだ出ていないので、個人の蔵書としては珍しいものに入るであろう。

慶長本万葉集は万一の場合を慮って、いつでも運び出せるように、机に近い場所に置かれてある。

二三年前のことだが、国文科を新設するという地方の某大学から、慶長本万葉集を譲って貰えないかという交渉を受けたことがある。鏡史郎の尊敬している東京のT大学の柳沢博士の紹介だ

ったので、鏡史郎も懇請されれば、手放さなければならなくなるのではないかと思っていたが、結局これは断わってしまった。交渉に來た若い講師が、普通の古本でもめくるように、ばらばらとぺえじをめくり、いきなり、

「一体、いくらで譲ってくれますか」

と切り出したので、鏡史郎は腹を立ててしまったのである。大体稀観本の取り扱い方を知らない。押し戴<sup>いた</sup>かないまでも、指の脂<sup>あぶら</sup>をつけないぐらいの注意はしてぺえじを開き、義理にも珍しいものを見せて貰<sup>もら</sup>う悦びと感動を顔や態度に現わすべきである。それが所蔵者に対する礼儀でもあれば、その書物に対する礼儀というものでもある。書物はどんな書物でも生命を持っている。殊<sup>こと</sup>に稀観本となると、それが今日まで生き永<sup>なが</sup>らえて來た歴史というものは、ひと通りのものではない。

鏡史郎はその時、若い講師に言った。

「柳沢先生からお手紙を頂戴してあったので、これはお譲りしなければならぬまいと、あなたのお顔を見るまでは、そう考えていました。併し、いまは考えを改めました。お譲りするわけには行かない。この書物が今日こまで生き延びて來たのは、代々の所蔵者たちのこの書物に対するなみなみならぬ尊敬と愛情のためである。恐らくどの所蔵者も、虫に食わせまい、火災にも遇<sup>あ</sup>わせまい、雨漏りのしみもつけないようにと、この書物のために、いろいろと気を使って來たのである。この書物は京都の素封家にあったものであるが、所蔵者が他界したあと、所蔵品を売立てるといふことを聞いて、私が出掛けて行って譲って貰ったものです。その家でも他の骨董<sup>こつどう</sup>品は売

立てに出すが、これを出す気はないということだった。ところが私が余り熱心だったので、それではということ、詰りあなたのような人にとって戴ければ、亡くなった所蔵者も満足だろうということ、買入れた時の値段そのまま譲ってくれたものです。私はこの書物を入手するため三回も京都へ行っています。本というものは、このようにして譲られ、このようにして手に入るものです。一体、いくらで譲るかと言われても、それでは困る。こうしたものには値段はない。人間の心から人間の心へと譲られるものです」

柳沢博士の方には、事のてんまつを述べ、鄭重な詫び状を認めた。折返して博士の方からも詫び状が来た。

慶長本万葉集は骨董的価値をも持っているものであるが、北村季吟の拾穂抄を初めとして、そのほかに、いまは古本屋でも入手し難くなっている江戸、明治期の万葉研究書や辞典類など、一応書棚のどこかに顔をのぞかせており、個人の蒐集としては誇ってもいいものではないかと、ひそかに鏡史郎の自負するところである。

鏡史郎は田舎の中学校を出て、代用教員として村の小学校に奉職したのを振り出しに、一生を小学校教員として過し、半島の基部にある三島市在の小学校の校長を勤めたのが、すごろくで言えは上がりである。中学校時代は上級学校へ進む志望を持っていたが、中学卒業前後から脚氣を患い、そんなことからほんの腰掛けのつもりで村の小学校へ勤めたのであるが、それがとうとう一生そこから足を洗えなくなってしまったのである。小学校は幾つか転じたが、いつも半島内の小学校許りで、任地が郷里に近いというのんきさもあり、児童教育という仕事も、やってみる

と、他の仕事に替えられぬ面白さのあることも判つて来て、鏡史郎はいまも一生教員として過したことを、少しも後悔はしていない。充分充実した一生の過し方だつたと思つてゐる。

それに、万葉に打ち込むことのできたのも、小学校の教員をしていたお蔭であり、これが他の職に就いていたら、経済的な面は兎も角として、そんな時間的ゆとりがあつたかどうかとも判らないし、第一そんな氣持になれたかどうか、甚だ怪しいものである。

万葉に取り憑かれたのは小学校へ勤めて十年ほど経つてからで、一流万葉学者の研究書を手当り次第読んでゐるうちに、學者になろうなどという野心は持つてやう筈もなかったが、たとえいにささやかでも、自分は自分なりの研究ができるのではないかと思つた。静岡県下だけでも、万葉の歌は五十七首読まれてゐる。大部分が東歌、防人関係のもので、概して無名歌人の所産であるが、そうしたものを対象として、地方的研究を纏めることができたなら、さぞかし本望であらうと思つた。

そんなことから、万葉集関係の書物を蒐め出し、結局のところ、研究の方はいっこうに捗々しく進まず、いつか立ち消えになつてしまつたが、蔵書の方は年々歳々多くなり、次第に研究より、蔵書を増やす方に情熱を傾ける結果になつてしまつた。本末でんとうしてしまつたわけであるが、これも、まあ仕方がないと、いまの鏡史郎は諦めてゐる。従つて、万葉関係の書物の蒐集家ではあるが、単なる蒐集家とは違つて、鏡史郎の場合、入手した書物を、書棚に並べる前に必ず眼を通す。従つて最も正確な言い方をすれば、趣味の万葉研究家であり、読書家であり、蒐集家であるということになるうか。



鏡史郎は校長時代は、“万葉校長”として、地方新聞に何回か紹介されたことがある。そんなことから郷土史家仲間に入れられており、時折、地方の文化団体のようなところから万葉についての講演を依頼されたり、同人雑誌から随筆を頼まれたりする。講演の方はめったに引き受けないが、原稿の方は、なるべく気やすく書くようにしている。一度だけ東京のちゃんとした短歌雑誌から原稿の依頼を受けたことがあり、それに載った文章が意外な反響を呼んで、一流学者からお褒めの言葉<sup>あすか</sup>と与り、大いに気をよくしたことがあるが、こうしたことは、あとにも先にも、一度だけである。

目下のところ、“万葉校長”は、“万葉町長”になっている。実際は町長をやめているが、町長時代の呼称がいまだに使われているのである。三島市在の小学校校長を最後に教員生活から足を洗った時、鏡史郎は父が一生を賭けた山葵栽培の仕事<sup>わさび</sup>を、おくれ馳せながら受け継いで、それに依つて余生を送ろうと決心したのであるが、郷里へ引込むと間もなく、むりやりに引張り出された恰好で村長役を押しつけられ、約束の一期を勤めあげたあと、村に町制がしかれて、町長としてまた一時期勤めさせられ、漸くにして去年の暮、健康上のことを理由に自由にさせて貰ったのである。

これから念願の山葵栽培の仕事に取りかかるわけだが、もう暫くは町長時代に関係した仕事のひっかかりで、何かと役場に顔を出さねばならない状態にあった。

山葵栽培の仕事は、亡き父の業を継ぐことでもあり、教員時代を通じて持ち続けていた夢でもあるので、母屋の方に住まわせている甥夫婦に自分に替って毎日の見廻りの役をやって貰ってい